天沼中学校／沓掛小学校／天沼小学校（ＡＫＡ）３校合同学校運営協議会
～合同学習会～

「これからの教育を考える」記録

実施日：令和７年 11 月 26 日（水）17：30～
場　所：天沼小学校アリーナにて
テーマ：「これからの教育が目指す方向性」
主　催：天沼小学校学校運営協議会（令和６年度３校合同学校運営協議会担当校）
参加者：天沼中・沓掛小・天沼小学校運営協議会委員、同校教職員、区内教職員

【実施目的】　社会状況の変化とともに、学校教育における授業の進め方の改善を求められている。これからの授業はどのように変わっていくのか、それによりどのような効果が得られるのか、そして具体的に何を大切にしていけばよいのかを学び、学校運営協議会としてはどのような視点を持ちながら、授業改善に支援していけるのか等を考えるきっかけとすること、学校・家庭・地域が同じ方向を向き、これからの子どもたちの学びを支えていくための共通理解を深めていくことを目的に、この合同学習会を実施した。

【次第】　＊実施校　会長あいさつ
＊講演「これからの教育が目指す方向性」
文部科学省初等中等教育局主任視学官　田村学氏
＊質疑応答
＊実施校　校長謝辞

【内容要旨】　これからの学校の授業では、教師が一方的に教えるだけでなく、子ども自身が「考え、話し合い、学ぶ力」を伸ばすことが大切。学習指導要領にあるように、何を覚えたかだけでなく、学びを使って「何ができるようになったか」を重視し、友達との対話や発表、探究的な学びを通して、理解を深めていく授業が求められている。つまり、知識を生きた力として身につけることが目的である。
講師は、多くの実践事例を持つことから、実際の授業事例をもとに、知識がつながり「なるほど」と実感できる深い学びとは何か、また話す・書くといったアウトプットや探究的な学びが、学力向上につながることを分かりやすく紹介した。
さらに、学校・家庭・地域が連携しながら、子どもたちの学びを支えていくためのヒントも共有された。

【合同学習会　内容】

■「教える授業」から「学ぶ力を引き出す授業」へ

授業や教育に対する従来のイメージは、社会の変化の中で少し古くなっており、全てを否定するわけではないが、発想の転換が求められている。

これまでの「教師が教え込む授業」から、子どもが自ら学ぶ力を発揮できる授業へと転換することが重要である。その際、教師の指導を否定するのではなく、子どもには学ぶ力があると信じ、その力が生きるように適切に関わり、支える役割が教師に求められている。

■「何を学ぶか」から「何ができるようになるか」へ

現在の学習指導要領にある「社会に開かれた教育課程」とは、学校で育成すべき資質・能力を明確にし、それを社会と共有し、実際の連携を通してより確かなものとして育てていこうとする考え方である。

これまで重視されがちだった「何を学ぶか」中心の教育から、「何ができるようになるか」を重視する方向へ転換し、知識・技能に加えて、思考力・判断力・表現力、さらに学びに向かう力や協働性といった資質・能力をバランスよく育てることが求められている。

そのため、従来の教師による一方的な「教え込み型授業（チョーク＆トーク）」から、子どもが主体的に学ぶアクティブラーニングへの転換が重視されている。

主体的・対話的で深い学びを通して、子ども自身が考え、話し合い、探究する学習を実現することが狙いである。

これは学習者の視点に立った「子ども中心」の授業づくりであり、幼児期から小学校、中学校、高等学校へと発達段階に応じて一貫して進められるべきものとされている。

この実現のためには、日々の授業改善と、それを支える教育課程（カリキュラム）をデザインすることが両輪となる。また、地域や外部人材との連携は重要であるが、支援や協力はあくまで学校の教育課程の中心と結びついてこそ効果を発揮する。

学校内外が教育課程を軸に連動し、「深い学び」と「探究」をキーワードに教育の質を高めていくことが全国の学校に求められている。

■事例から見る「深い学び」とは何か

滋賀県の中学校３年生の理科授業では、「人間に最も近い霊長類は何か」という発問を通して、データに基づき進化を科学的に探究する学習が行われた。結論自体はチンパンジーであったが、当初、生徒の理解や納得は表面的で曖昧なものだった。しかし、問い返され振り返りを促されることで、生徒はこれまでに学んだ知識とのつながりに気づき、「なるほど」と段階的に理解を深めていった。

この過程を通して、生徒は「納得」から「理解が深まった」という感覚へと変化し、深い学びとは知識が結びつき、意味づけられることで生まれるものだ。

また、広島の小学校の総合的な学習の事例で、平和学習を通して子ども同士の対話が重なり合い、他者の考えを取り込みながら思考がネットワーク化していく授業があった。

１人目の発言をもとに、２人目と３人目と４人目の言葉が耳から頭に入ってきて、トントンと繋がり、ネットワーク化していき、イメージが具体的に持てるようになっていき、深い学びになっていく。一個一個の単体の知識ではなくて、それが結びついてつながり合ってくると、その知識はより深いものになっていくんじゃないかということ。

これらの事例から「深い学び」とは、単独の知識の習得ではなく、知識や経験が相互につながり、主体的・対話的に再構成されることで生まれるものであると考えている。

■アウトプットを軸にした深い学びの実現

これまでの授業は、個々の知識を覚えてテストで確認する学習を重視してきたが、知識が容易に得られる現代では、それだけでは不十分である。重要なのは、個々の知識をつなげてネットワーク化し、概念として理解し、自由に活用できる「生きた知識」を育てることである。

授業の事例からも、子ども同士の対話を通して知識が結びつき、「なるほど」「そういうことか」と理解が深まる様子が示されている。

その鍵となるのがアウトプットであり、話す・書くといった音声言語や文字言語を使って表現することで、知識は構造化され、定着しやすくなる。インプット（教師による説明）がなくていいということではない。インプットも必要だが、一方的な講義に偏るのではなく、アウトプットを多く取り入れる授業が望ましいとされる。子ども自身も、インプットとアウトプットのバランスとして「アウトプット多め」を求めている。

全体を 10 とすると、インプットとアウトプットは何回くらいが理想だろうと中学３年生に聞いてみたところ、４対６とか、３対７という答えが返ってきた。以前に行ったイギリスのある都市の教育委員会は、２対８にしたいと言っていた。

音声で考えを広げ、文字で整理・定着させる授業を通して、知識が意味や感情と結びつき、忘れにくい学びへと変わっていく。こうした視点に立った授業改善が、深い学びを実現する上で重要である。

また、「いいね」「すごいね」「なるほどね」といった肯定的な声かけは、子どもの発話を促し、学びを深める効果がある。学校授業の中でも、家庭においても大事な観点である。

■学力向上につながる「探究的な学び」

第二の重要な視点として「探究」が挙げられる。これは、知識を一方的に教え込む学習から進み、課題設定・情報収集・整理分析・まとめや表現といった問題解決のプロセスを学習に取り入れる考え方であり、総合的な学習の時間を中心に実践されている。

探究学習は、子どもが自ら課題を見つけ、地域や身近な問題を調べ、解決を考える活動で、多くの良い実践例が生まれている。

当初は「学力が下がるのではないか」という懸念もあったが、PISA 調査などの結果から、総合的・探究的な学習を十分に経験した世代ほど学力が向上していることが示され、探究は学力低下ではなく、むしろ学力向上に寄与する可能性が高いことが分かってきた。

学力調査でも、探究的な学習に取り組んでいる子どもほど学力が高いという相関が確認され、国際的にも探究を重視する流れが広がっている。

探究学習が学力を高める理由は、課題解決の過程で各教科の知識や技能を「活用・発揮」する点にある。情報収集では社会科的な力、分析では算数・数学的な力、まとめや発表では国語の力が使われ、教科横断的に学びが深まる。その結果、知識は単なる暗記ではなく、自由に使える思考力として定着する。

さらに、実験研究からも、知識は繰り返し学習するだけでなく、アウトプットすればするほど長くにわたって残る。つまり、長期記憶に残りやすいことが示されている。

探究的な学びは、知識を意味や経験と結びつけ、印象的な学習として定着させる効果がある。

こうした理由から、探究学習は小・中学校だけでなく高校にも広がり、大学入試や大学教育においても評価される重要な学びとして位置づけられつつある。

■会場からの問い掛けと返答

---

① アウトプットが苦手な子への力のつけ方

- 体験をやりっぱなしにせず、文字で振り返る活動が効果的。
- 特に文字言語は思考を整理するのに有効で、力が定着しやすい。
- 書くことは面倒という現実もあるが、小さくても継続すると力になる。
- キーボード入力は文字量が増えやすく有利。デジタル学習でアウトプット量が増え、学びが深まる可能性。
- 「書く＝思考が回る」ため、紙でも入力でも意味がある。
- 子どもが入力中は見守る時間を大切に。集中の場が学びを深める。

---

② 高等学校の現状の変化

- 高校では探究学習が前面に出てきている。
- 大学入試も変化し、総合型選抜（AO・推薦）が一般入試を超え 50%超に。
- 大学は探究経験を持つ生徒の方が大学内でも伸びることを確認しているため、その枠を増加させている。
- 東北大学や早稲田大学なども総合型枠を大幅に拡大。
- 小中にも波及し、学びの在り方全体が変わりつつある。

---

③「子ども主体」に立つときの注意点（教師の役割）

- 「子ども主体＝教師は何もしない」ではない。

- 子どもの主体性と教師の指導性は相反せず相乗効果がある。
- 教師は教材研究・課題設定・環境づくりで学びを支える役割を持つ。
- 「委ねる」場合は、何をどれだけ任せるかを教師が判断する必要がある。

---

④ アウトプットしたがらない子への対応

- 発言を嫌がる背景は「話せない」ではなく、自信がない、受け止められるか不安、スキル不足が多い。
- 対策として
  - ◇スピーチ練習（例：週明けの朝の時間等を利用して、週末にどのように過ごしたかを、隣同士で少し話し合ってみる）
  - ◇ 聞くスキルも同時に教えることで、クラスに安心感が生まれ話しやすくなる。
- アウトプットは急には育たないため段階的トレーニングが必要。

---

⑤ インプットは何をどこまで教えるべきか問題

- 現在、学習指導要領で「大事なコア知識」を整理中。
- その結果、教科書も今後より選択と集中される方向へ。

---

⑥ 「深い学び」は過去と何が違うか

- 昔も時間をかければ深まりはあった。ただし昔は「覚える段階が低学年だとすると、学年が上がってから使う段階になる」という待ち時間が長いモデルだった。
- 今は「覚えたらすぐ使う →また覚える →使う」を日常的に回して深める点が違い。
- 過去の教育を否定するのではなく、良い部分を生かしつつアップデートしている段階である。